

下野市立古山小学校

1 学校課題

主体的に考え、対話的に議論する力を育てる授業の創造 ～道徳科の授業における発問の工夫を通して～

2 研究計画

(1) 主題設定の理由

本校では昨年度まで研究主題「主体的・創造的に学び伝え合う力を育てる授業の創造」のもと、書くことの表現力の育成を研究してきた。今年度は、さらに『主体的に考え、対話的に議論する力』を育てたい。特に石橋地区の「心の教育の推進」に基づく『道徳科』の授業を通して進めていく。本校の児童の課題である「表現力(説明する力、書く力、伝える力、発表の力等)」の育成にもつながるものと思われる。

(2) 研究の仮説

次のような実践をすることで、目指す児童像「自分の思いを伝え、話し合いを通して考えを明確にできる児童」の育成が図れると考える。

- ①ねらいとする価値に対して自分の考えをもつことができるように導入を工夫する。
- ②自分の思いを発信したり、友達の考えを取り入れたりする話し合いの仕方を工夫する。
- ③友達の考えを聞き、自分の考えを再構築する力を育成する。

(3) 具体的な手立て

仮説を実証していく上で、以下のような具体的な手立てを取り入れて研究をしていく。

①導入の工夫について

- ア 身近な生活の中の問題や社会的問題などをとりあげ、導入における発問の工夫をすることで、問題意識をもてるようにする。
- イ ねらいとする道徳的価値に関わるアンケートを事前に行い分かりやすく提示したり、生活経験について話し合いなどを設定したりすることで、児童が「考えてみたい」「話し合ってみよう」と思えるようにする。

②話し合いの工夫について

- ア 自分事として捉え、より深く理解できるようにするために、様々な資料の提示の工夫をする。
- イ 登場人物を即興的に演じる役割演技などを取り入れることで、問題場面について実感を伴って理解することにより、児童が自分との関わりで道徳的価値について考えられるようにする。
- ウ 教師の意図や学習場面に応じて一斉型だけでなく、対話や話し合いがしやすくなるよう様々な学習形態を設定する。

③自分の考えを再構築する力の育成について

- ア ねらいとする道徳的価値に結びつく中心発問では、多面的・多角的に考えられるよう発問を工夫する。
- イ 考えの根拠を確かめる問い返しをして、同じ答えでも根底にある考え方や感じ方は様々であることに気付くようにする。
- ウ 時系列に並べたり、効果的に場面絵などを配置したりして、視覚的に思考の流れが見えるよう板書を示す。
- エ 考えたことや感じたことを付箋などに書いたりウェビング法などを用いて話し合ったりすることで、様々な考え方や感じ方を整理できるようにする。
- オ 振り返りの時間を十分に確保することで、ワークシートなどに書く活動を取り入れ、これまでの自分やこれからの自分の生き方などについて書きながら内省できるようにする。

3 研究内容

(1) 第1回研究授業(9/9) 5年3組 「責任ある自律的な行動(A-1)」

- ①問題意識をもたせるため、アンケート結果を提示し自分たちの問題として考えさせ、「導入の工夫」につなげた。また、多面的・多角的に考えさせるために、3人の登場人物のそれぞれの気持ちを考えさせ「問い返し」について工夫した。
- ②授業研究会での話し合い

- ア アンケートの内容や活用の仕方を工夫することで、取り上げる道徳的価値について児童が考えを深めることができた。
- イ 問い返しを工夫することで、立場のちがいによる考え方を比較することができた。
- ウ 登場人物の立場に応じた構造的な板書は、多面的・多角的に考える手助けとなった。



エ 的確な問い返しができるように、発問に対して予想される児童の反応を十分に検討しておく必要がある。

(2) 第2回研究授業(12/9) 「友だちならどうする(B-10)」

①問題意識を持たせ自己を見つめられるような動機付けができるような「発問の工夫」をした。また、多面的・多角的に考えさせるため、母と兄の意見の間で葛藤している主人公の気持ちを重点的に考えさせた。

②授業研究会での話し合い

ア 導入時点での道徳的価値についての考えを板書し、終末で再確認することにより、考えの深まりを視覚的にも捉えることができた。

イ 事前に多面的・多角的に考えさせるための問い返しを考えていたのが役立った。

ウ 教材だけでは分からない登場人物の信頼関係や心のつながりについてじっくりと考えることで、道徳的価値への理解が深まった。

オ 教材から離れ、自分たちの生活について考える終盤の時間を十分に確保する必要がある。

(3) 第3回(12/23) 「しんせつにするときもちがいい(B-7)」

①中心発問ではねらいとする道徳的価値に直接結びつくよう「発問を工夫」した。また、「資料提示の工夫」をしたり、「板書構成の工夫」をしたりして多面的・多角的に考えられるようにした。

②授業研究会での話し合い

ア 役割演技や紙芝居を活用して児童が具体的に場面を実感することができた。

イ 表情カードは、発表に苦手意識がある児童の意思表示に有効だった。

ウ 資料の内容について黒板に板書をし、自分たちの生活についてはホワイトボードに掲示した。場所を区別して提示したことは、資料から離れ自分ごととして考えるための手立てとして有効だった。

エ 気持ちの変化を問う発問では「なぜ・どこで・どのように変わったのか」などと具体的にするとよかった。



4 本年度の成果と課題

(1) 研究の成果

仮説①について

ア どの授業も導入部の発問を工夫することで、児童がねらいとする価値から離れることなく考えていくことができた。

イ 導入で興味を引きつけることで、問題意識をもって授業に臨むことができた。

仮説②について

ア 多面的・多角的に考えさせるために中心発問や問い返しの発問について十分に検討したことが、児童が深く考え、話し合いを進めていくことにつながった。

仮説③について

ア 板書を工夫することにより、児童が考えを再構築していくことがスムーズになった。

イ 自分の考えをうまく表出できない児童でも、表情カードなどを使用することで授業に参加できていた。

(2) 研究の課題

仮説①について

ア アンケートの内容を事前に吟味する必要があるとともに、提示の時にねらいとする道徳的価値から外れないものとする。

仮説②について

ア 登場人物が葛藤する場面や、自分に置き換えて考える場面など、考えを深める時間の確保が必要である。

イ 効果的な発問や問い返しのために、道徳的価値についての理解を深め、発問に対する反応を予測しておくことが必要。

仮説③について

ア 児童が自分の考えの深まりや変化を実感できるよう、話し合った道徳的価値について振り返る時間が大切である。

イ 導入でのしかけを工夫したり提示の仕方や板書の工夫について研究したりしていくことで、子どもたちがねらいとする価値について深く考えることができるようになった。また、自分たちが考えたことを表現することに抵抗を感じなくなるような支援(表情カードなど)についても考え、実践することができた。しかし、深く考えるほど時間の配分が難しくなり、子どもたちのよい意見を取り上げ深く考えさせたり、振り返る時間の方法や確保が難しくなったりと課題も見えた。